

遺体の処理方法と 身体観



ネパール



カンボジア



日本

火葬

火葬

- 葬送の一手段として遺体を焼却すること
- 日本では最も一般的(ほぼ100%)

宗教ごとの死体観 (火葬を尊ぶ場合)

- 仏教、ヒンドゥー教
 - 仏陀の教え
「**霊魂による肉体への未練を断ち切り、**
煙とともに霊魂を天上界に送って成仏を促す」

宗教ごとの死体観 (火葬を否定する場合)

- 儒教
 - 身体を傷つけるのは大罪。火葬は身体への毀損行為
- ユダヤ教、イスラム教
 - 死者復活の教義を持ち、復活の際にもとの身体が必要と考えられている
 - 例外：処刑後の死者への追加刑罰としての火葬
- キリスト教
 - 聖書の記述から伝統的に火葬に否定的な見解あり
 - しかし、近年は忌避感が薄れ、国や地域によって割合が異なる(米国20%、イギリス70%など)

日本人が火葬する理由

- 公衆衛生の観点から衛生的
- 都市部では土葬に必要な土地を確保できない
- 無宗教を自認する人が多く、埋葬方法にこだわらない
- 火葬を尊ぶ**仏教**の影響
- 墓はイエを単位として考える人が多い
→ **先祖と同じ墓に入れるように**するため



土葬

土葬とは

- 遺体を土に埋める「埋葬」のうち、遺体
そのままに埋めるものをいう
- 早くはネアンデルタール人から
- キリスト教、イスラム教、儒教など火葬
に否定的な宗教のもとで
- 現代は公衆衛生・費用・用地の観点から
禁止されている地域も多い

各地の土葬・身体観

- 中国(儒教):「火葬は**遺体に対する冒瀆**」現在は火葬が義務だが、富裕層に関しては土葬に固執、火葬用の遺体を売買するビジネスもみつまっている
- 米国(基督教):**最後の審判の時に復活する**ため、生前の肉体が失われることは禁忌。キリスト自身も土葬。不況から費用の安い火葬も盛んになった
- イスラム社会:キリスト教と同様、最後の審判の教理

日本における土葬

- 仏教の教えや衛生的な問題から現代では火葬が主流
- 昭和までは、整備・費用の面から土葬も一般的に行われていた
- 土葬では死者が生き返らないような呪術的な工夫(屈葬、骨を折る、頭を下にするなど)
- 1873～1875年には仏教に反発した神道派の主張を受け入れ、火葬禁止令も
- 天皇家
- 埋める場所も様々



水葬

方法

遺体を海や川に沈める(宗教上の理由から、土葬した後行う場合もある)

場所・対象

- インドのガンジス川流域等（ヒन्दゥー教）
- 洋上での死者や上陸戦の犠牲者

日本の場合

- 刑法190条 死体遺棄罪
- 船員法15条 日本国籍の船では、船長の権限で行える
 - ※船舶の航行中に船内の人間が死亡した場合のみ
 - ※複数の条件を全て満たす必要がある

Belief

- 仏教の無常観（ヒンドゥー教は仏教の影響を受けている）→
全てのものは変化する

※宗教的儀式ではない水葬の場合、遺体を保存しておけないという理由



風葬

風葬とは

- 遺体を風にさらし風化を待つ葬制
- 崖や洞窟、樹上で行われることもある
- 日本ではかつて沖縄、奄美などで見られたが、現在は行われていない
- インドネシア・トラジャ族（現在はキリスト教の流入で廃れつつある）

琉球地方の風葬・身体観

- 方法は二通り
- 1 「後生」と呼ばれる不浄の聖域(洞窟、山林)に遺体を安置しそのまま共同の墓地とする(写真:徳之島の共同墓地)
: 太陽崇拝の念から、死体を日光に当てるのは不浄の罪
- 2 棺に入れ風化して白骨化した後、親族が洗骨し、壺に収める
- 「魂は煙のようなもの」という身体観
- 風葬は魂を海の彼方のニライカナイに還すもの



ニライカナイ: 豊穡や生命の源であり、神界でもある。年初にはニライカナイから神がやってきて豊穡をもたらし、年末にまた帰るとされる。また、生者の魂もニライカナイより来て、死者の魂はニライカナイに去ると考えられている

インドネシアの風葬・身体観

- 共同の洞窟墓
 - 副葬品であるtautauと呼ばれる人形とともに
-
- 三角形の小屋
 - 香木の周りに置くことで死体の匂いが軽減されると考えられている



チベットで最も一般的な葬儀

※グロ注意

鳥葬

鳥葬

- 遺体を郊外の荒れ地に運び、(食べやすいように)裁断して、ハゲワシなどの鳥類に食べさせる
- チベット仏教が有名。パールシー(インドのゾロアスター教徒)も行う

宗教ごとの死体観

- チベット仏教
 - 儀式によって魂が開放されたあとの肉体は「肉の抜け殻」。魂の抜け出た遺体を天へと送り届けるための方法
- ゴロアスター教
 - 火を神聖視し、空気、大地、水といった自然を人間の死体という不浄なるものによって穢すことを禁止 →火を使わず、自然を穢さない鳥葬を行う
 - 古くから死者の肉を削ぎ動物に与える習慣があった。鳥に死体を与えることは人生で最後の功德とされる



宇宙葬

散骨の一形態

個人の遺骨をカプセルに納めてロケットに乗せ、宇宙空間（地球を周回する軌道上）に打ち上げる。

方法

シリンダー状の容器に数グラムの遺骨を装填し、数十～数百人分の遺骨を同時に打ち上げる。

費用削減の工夫

- 他の衛星を打ち上げる際に相乗り
- 既存の商業ロケットを転用

Belief

- 地球周回軌道に乗る
→ 空から見守ってくれる
- 流星になることもある
→ お星さまになった

まとめ

遺体の処理方法の背景にある 身体観の源泉とは...

- 宗教的なbelief
 - 人はどこから来てどこへ行くか
 - 死者の復活を信じるか
 - 心身二元論か、一元論か
 - 遺体は神聖か、穢れたものか
- 時代の変化とともにbeliefが薄れる場合も
→ 公衆衛生・費用・用地など practicalな理由で
遺体処理方法も変化
- 技術革新に伴う新しい方法 ex. 宇宙葬